

# 「水なし」弾みに SDGs企業へ

ホーナンドー (大阪市)

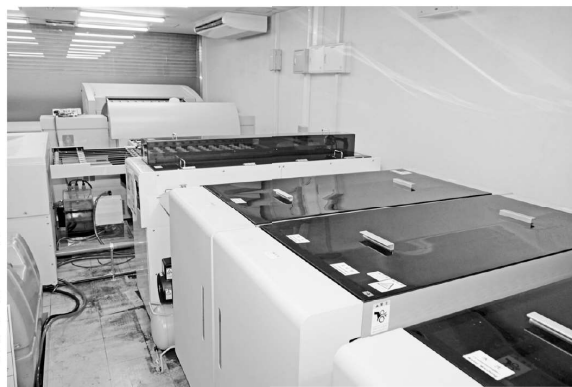
株式会社ホーナンドー(大阪市中央区、山口孝治社長、従業員数46人)は、印刷業からプロモーションサービス企業へ見事な業変遷を遂げたことで知られる株式会社シー・レップ(東京&大阪本社、北田浩之社長)のグループ印刷会社である。東大阪市にある生産工場の別フロアには、別会社で製本業の株式会社邦南堂(東大阪市、北田真也社長)もあり、プリプレスから印刷・製本加工までの一貫生産体制で社業を伸展させている。そのホーナンドーがこのほど、水なし印刷の採用に踏み切った。責任者の工藤裕介常務に話を聞いた。

◆品質向上と修理費減へ  
色機Ⅱ東大阪第二工場) 画面8色機「J-print」だ。  
ホーナンドーでは現在、今回、「水なし仕様」に転換したのは、東大阪同4色機、同2色機Ⅱ東大阪第一工場にあるアキヤマ大阪第一工場、菊四裁4製タフルデッキ型の菊全

のメック摩耗による交換頻度が高くなり、そのコストの見直しが必要にな



水なし仕様に転換した菊全画面8色機



露光・現像機

## 環境企業へ次のステップ

った」と明かす。  
インキングローラーとして親油性の高い銅メックローラーを使用している場合、湿し水中の炭酸カルシウムがローラー表面に蓄積し、これを除去しているうちに銅メックが摩耗してインキが転移しにくくなるため、ローラー交換が必要となってくる。これに加えて、「湿し水装置の老朽化や、通し枚数の多い仕事で色ムラが発生しやすくなってきた」という。



工藤常務

こうした機械修理に關わるコスト高要因や印刷品質の改善向上を図るため、日頃から世話になっている印刷機メンテナンス会社のタケミ株式会社と相談したところ、勧められたのが「水なし」仕様への転換だった。

◆見当精度の良さに高い評価  
さっそく、タケミの指導や東レの協力を得て、5月から印刷品質の確認テストに入り、インキも水なし印刷に最適と言われる銘柄の油性インキに切り替えた。

ファンアウトの解消による見当精度の向上、安定した再現性などテストの結果は上々で、8月から本格運転に入った。同社の場合、毎週、水

曜日と土曜日の2時間、月一回の半日というメンテナンス時間を確保している。小まめなインキツボの清掃など水なし印刷に欠かせないメンテナンス作業も苦にはならぬ。水あり版と比べて割高と言われる水なし版だが、水に起因するメンテナンスコストを考えると十分吸収できるレベルだという。

「私もよく見て皆が初体験だったが、きわめてまろやかな揮発性溶剤の排除や現像液回収の手間やコストが不要という水なし印刷の強みは環境問題にも貢献できる」と期待している。

◆無人刷版室に向けて  
このように順調な立ち上げたのだが、本格的稼働が始まると思われぬ制約条件にとまどったのが水なし版の現像工程だ。水なし版の場合、感光層の上にあるシリコンゴム層が水の代わりにインキをほぼ非面線部にならしているが、露光後、現像工程に入る前に、版表面をカバナーするフィルムを剥離しなければならぬ。このカバナーフィルムを剥離するのが現像機の入口にセットされた自動剥離装置だ。これについては、工藤常務とともに東レの担当者も解消すべき今後の課題として知恵を絞っているところ。

「これから冬場に向かうが、とにかく問題点があれば一つひとつつづしながらかつていこう。前向きに取り組んでいきたい」と語る工藤常務。その

かでも見当精度の良さに対する現場の評価は高い。また、給水ローラーの拭き取りといった作業がなくなることでオペレーターの負担低減になるし、その分の時間を他に振り向けることもできる」と水なし化のメリットを高く評価する工藤常務。その水なし化に合わせて、8色同時にフィードバックできる色調整装置(X-rite社製)を新たに導入し、数値管理によるさらなる品質向上を目指す。

自動剥離機である。出力版が一定枚数になるとクラフトテープと紙管を交換する必要がある。人手さえあれば簡単な作業だが、同社の場合は本社のある大阪市内から出力データが送られてくるため刷版室は完全無人となる。そのため、同社では長尺のクラフトテープを使って版数を稼ぐなどの工夫をしている。

現在、テープの交換とそれに伴う作業について、は、一日一回、本社のオペレーターが工場に原稿を持参するので、その際に行うようにしているという。

◆SDGs企業宣言  
取材の最後に、今後の抱負を尋ねると、「SDGs企業を目指したい」という答えが返ってきた。「SDGs」とは2030年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標」のこと。印刷業界の職者によれば、印刷はすべての産業と関わりがあり、その意味ではSDGsにきわめてフィットした産業だとい



東大阪第一工場

「当社は現在、エコアクション21、FSCとこの環境に関する認証を受けており、今回、水なし印刷を採用したことでパタフライマークを使うことができる。これらの内容は、SDGsが掲げる17の目標うちの11目標と重なる。これに恥じない会社となるために、次のステップへ目標を掲げたい」というのが工藤常務の思いだ。一歩先行く環境企業へ、着実な前進が期待される。